

りしないのでこれ等はさけたい。御指導頂いた原寛先生に深甚の謝意を表する。

(千葉立山武高等学校)

Persicaria mitis Gilibert (*Polygonum Persicaria* L.) distributed widely in Europe and America, is found in Japan too. And a variety of the species, *P. mitis* var. *hirticaulis* (Danser) Hara et I. Ito¹⁾, also occurs in Japan, as Danser noted in his original description. This variety flowers from August till October, and according to Danser, it is widely extending into the tropical region of Asia. The writer examined pretty many specimens of this variety from Japan, Korea, and China, in the Herbarium of the University of Tokyo.

○ アカハナワラビへの疑問 水島正美: Masami MIZUSHIMA: What is *Botrychium nipponicum* Makino?

本誌 30 巻 190 頁 (1955) に行方富太郎氏がアカハナワラビの紅化現象とそれがフユノハナワラビの方に近縁であると思うという見解とを發表された。

小生も東京都北多摩郡谷保(ヤホ)村産のオオハナワラビと“アカハナワラビ”, 産地不詳のフユノハナワラビを唯数株ではあるが約 10 年間植えて来た。此のオオハナワラビと“アカハナワラビ”とは同一林内の暗い, 厚く落葉が堆積した所に散生していた多数個体中より撰び採つたものである。即ち仲秋の候, 全体に煉瓦紅色を帯びた個体と暗緑色の個体とである。其の後毎年両者は個性を守り, 全体紅変するものと裂片の半位までしか着色せぬものとに分れていた。着色の期間は行方氏の観察と大体一致するようであるが, 暗い陰から冬中直射日光を受けるような場所へ移植してからは以前より強度に着色するのが見られた。但し此の時に弱着色性の個体では殆ど変りないようである。即ち受光量も紅変の程度を左右する一要因ではあるが, 行方氏も日照の有無は“あまり”関係がないようであると言つておられる点から, 受光量と色調との関係はやはり程度の問題と云うことになる。

実葉の枯凋時期に就いては注意して観察して来なかつたが, 本年 1 月初旬に於いて緑色のものでは実葉頂部のみ枯れて他は淡緑色で生きており, 紅化したものでは葉柄の半以下まで枯れており, フユノハナワラビでも陽地に植えた株では枯れて地に倒伏していた。此の点は行方氏の観察結果に近いが, 紅化株で枯倒してしまつてはいないので異り, 更に将来継続して観察する要がある。

牧野先生のアカハナワラビの基準標本を見ていないが, 東大理学部の手紙庫にある標

1) *Persicaria mitis* Gilibert var. *hirticaulis* (Danser) Hara et I. Ito, stat. nov. — *Polygonum Persicaria* Linn. Subsp. *hirticaule* Danser in Bull. Jard. Bot. Buitenz. ser. 3, 8: 184 (1927).

本とは外見上一致するようであり、小生は此の紅変する株をアカハナワラビと思つてゐる。並べて植えてあるオオハナワラビ、フユノハナワラビと此の個体とを比較すれば、裸葉の概形に於てはオオハナワラビにずっと近い。試みに気孔の大きさを比べて見るとフユノハナワラビが最も小さく、オオハナワラビとアカハナワラビとは略々同大であつた。此のアカハナワラビの小羽片は確かにオオハナワラビより狭く、更に深く切れて先が尖つてはいるが、牧野先生の実原記載にもある通り変化の幅を考えねばならない。又、大きく3又した中の最下の2羽片は決してより狭いという訳ではない。縁辺はオオハナワラビでは外曲して鋭い重鋸齒が並び、アカハナワラビでも同様であるが更に深く切れる。フユノハナワラビでは縁辺は殆ど平坦で細重鋸齒を刻む。此の場合に齒の鋭さからはオオハナワラビ、フユノハナワラビ、アカハナワラビの順に微かながら鈍くなつて行き、牧野先生行方氏の言に適合しない。細脈は何れも浮出すことなく、透過光線によらば見え、走る密度はフユノハナワラビが最も大で他は差を見出し難い。

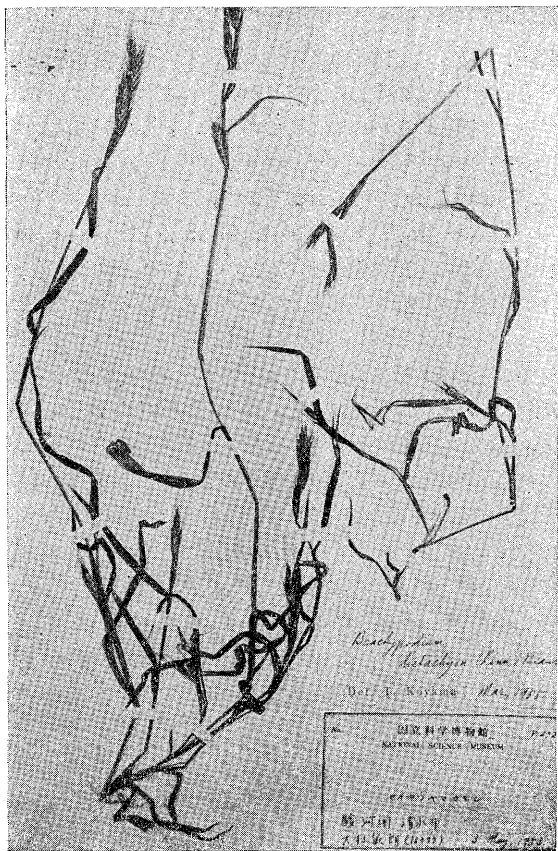
以上が小生栽培の3者の観察結果である。行方氏は“アカハナワラビの中にも紅変せずに可成り緑色を残して僅に紅ばんでいるものもある”と言われる。之は小生の経験中にもあり、牧野先生の附記にも両者は同一地区内に産するとある通り、丹念にオオハナワラビの色調を見て行くと、此のような個体はオオハナワラビの個体変異の中に含まれてしまうように見える。又上記の観察内での各形質を比較すると、アカハナワラビをフユノハナワラビにより近いと見得る点は実葉の枯凋時期のみと思うが、之に関しては各地で多くの個体に就いて調査の必要がある。更に留意すべきはハナワラビ類の裸葉の形状、実葉の分枝工合は野外に於て可成りの変化を見ることがある。之を併せて考えれば、小生の観察結果からは「アカハナワラビはオオハナワラビよりもフユノハナワラビの方に近い」と云う類縁関係を想うことは困難である。むしろオオハナワラビの晩秋から着色して翌春再び緑化する現象は、スギ、ヒノキ等に見る色彩の季節的变化と相似たものであり、スギやヒノキの群落中に色の度合の変化があるのと同一現象であると考え。即ちアカハナワラビとはオオハナワラビの着色に於ける極端形であると言えよう。従つて分類学上の扱ひは、アカハナワラビを認める立場をとる限り、形質を認識する上の「便宜」を考えて品種の級位に置くのが至当であろう。然し羊齒類には門外漢の小生は学名の組換えを差控へ、小論に対する諸彦の御批評に俟つ次第である。

(資源科学研究所)

According to my observation during a long cultivation, I came to the conclusion that *Botrychium nipponicum* Makino (in Journ. Jap. Bot. 1: 5, 1916) should merely be an extreme form of *B. japonicum* Underw.

Although Mr. T. Namekata regards *B. nipponicum* as a distinct species akin to *B. ternatum* Sw. (in this Journal 30: 190, 1955, in Japanese), species of the genus at least in Japan are fairly variable morphologically. So far as my experience

goes, the degree of lateritious colour of *B. nipponicum* in winter seems to be a matter of individual variation and merges into dark green fronds with a brick-red tint on the margin in *B. japonicum*. This hibernal coloration may well be compared with that of *Cryptomeria japonica* or *Chamaecyparis* spp. which is a well known phenomenon in cooler region in Japan. In the case of these gymnospermous plants, leaves turn brownish or lateritious colour, in a variety of tones, in winter and become deep green again when spring comes. This is also the case in *Botrychium* in question, and, therefore, the characteristic colour of *B. nipponicum* is most likely considered to be an extreme tint in winter. Thus *B. nipponicum* deserves at most "forma," I think.



○ **Brachypodium distachyon** 本州清水に
帰化す (大村敏朗):
Toshirō ŌMURA: *Brachypodium distachyon*
a new naturalized grass,
found at Shimidzu,
Honshu.

昭和28年5月3日、清水港附近へ帰化植物を採集に出掛けた際、港に近い道路端に見なれぬ禾本が一ヶ所小群落をなして居た。帰宅して早速調べて見たが不明だったので、その儘になつて居た。本年3月、機会あつて、小山鉄夫氏に同定を願つた処、*Brachypodium distachyon* (L.) Beauvois である事が判明した。

本種は歐洲産の禾本で、高さ15-40cm許の一年草、葉舌に褐色の短毛があり、